渤海との外交から 古代日本の文化変容まで

浜田 久美子

1972年生まれ。早稲田大学第一文学部卒、法政大学大学院人文科学研究科博士後期課程修了。大東文化大学文学部教授。専門は日本古代史。

はじめに：自己紹介

学部卒業後に国立国会図書館に就職し、夜間の大学院に通いながら、図書館の仕事と古代史の研究をともに20年以上続けてきた。

図書館でレファレンスを担当していた経験から、研究者や院生、学生だけでなく、在野で日本古代史に関心をもつ人にも裾野を広げ、その魅力を発信しようと思がけている。2020年刊の『日本史を学ぶための図書館活用術』（吉川弘文館）や、2021年刊の『古代日本対外交流史事典』（八木書店、鈴木靖民氏監修、高久健二氏・田中史生氏との共編）はその成果である。

今回は私の古代史研究を紹介するが、国立国会図書館の電子展示会には、私が担当した「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」のほか、「近代日本人の肖像」や「博覧会——近代技術の展示場」「日本国憲法の誕生」「史料にみる日本の近代」など多くの魅力的なウェブコンテンツがあり、学校現場でも活用できるので、あわせてご覧いただきたい。

「渤海使」から「渤海」へ：研究の始まり

卒業論文で、大学寮出身者が渤海からの使者（渤海使）の迎接や漢詩文交流を担うことに関心を持ち、大学院では、渤海使への迎接体制や外交儀礼について研究した。

私の関心は古代日本の外交制度や文化交流にあり、その分析対象が「渤海使」であったのだが、「渤海使」と書けば「渤海史」の間違いとみなされ、渤海王国を研究していると認識された。確かに、渤海を論じていたのは日本古代の対外関係史や中国史、朝鮮史の研究者であり、自然とその仲間に入った。これにより、研究テーマは唐や新羅と日本との関係にも広がったが、古代日本の諸制度・諸儀礼と外交制度・外交儀礼との比較には広がらなかった。今でもこれらは古代史の盲点だと考えている。

「渤海使」から「渤海」に視野が広がると、渤海王国が残した史料はほぼ散逸し、中国と日本の史料に外交の足跡が残るのみであると知った。とりわけ、渤海の記事がもっとも豊富に残るのは日本の史料であった。そこで、渤海の外交文書を読むために研究会（国書の会）を立ち上げた。この成果が、鈴木靖民・金子修一・石見清裕・浜田久美子編『訳註日本古代の外交文書』（八木書店、2014年）である。

外交文書の研究:私の研究(その1)

「武芸啓す。山河は域を異にして、国土は同じからず。延かに風猷を聴きて、但だ傾仰を増すのみ」(原漢文)。727(神亀4)年に初めて来日した渤海使が持参した渤海王大武芸の国書の冒頭である。「渤海王大武芸が啓を送ります。渤海と日本とは、山河や国土は同じではないが、日本が天皇の徳に教化された国であると聞き、慕わしさが増しています」という意味である。「王名+啓」で始まるこの書式を「啓」(王啓と呼んでいる。

外交文書の難しさは、中国の故事を引用し、対句表現に長けた四六駢儷体という文書の難解さに加え、相互の外交認識が一致しているわけではない点にある。古代の日本は、唐を模してみずからを中華に位置づけ、周辺国の渤海や新羅を日本に朝貢する臣下とみなしたが、渤海や新羅が日本の思惑通りに朝貢姿勢を示したわけではない。

また、変化する国際関係にも注目しなければならない。唐との関係が悪化し、新羅や渤海が日本との外交を重視した時期もある。たとえば、渤海の日本への最初の遣使は、渤海の領土拡大による周辺国(新羅や黒水靺鞨、唐)との緊張関係が背後にある。上記の渤海国書で、渤海王が日本の天皇を慕う気持ちを表しているのも、日本に接近するためであろう。

このように、外交文書は古典の知識で表現される普遍的な礼秩序と、国際関係の実態との双方から読み解く必要がある。

727年の第1回渤海使以降、926年に渤海が契丹に滅ぼされるまで、渤海使は30回以上来日した。渤海使は渤海王からの国書を持参したが、日本の正史(『続日本紀』以後の五国史)に本文が記録されている渤海国書は14通しかない。本文が残らない国書は、日本の外交認識に反した内容が記されていたのであろう。

しかし、残された渤海国書からも、渤海が日

本に朝貢していないことが明らかにされている。石井正敏氏は、渤海国書の「啓」という書式が目上の人に用いるものでありながら、渤海は大國高句麗の後身を自認し、日本を同格に扱っていると指摘し、渤海が日本に朝貢していたという戦前からの説を否定した^①。

このような先行研究に導かれ、私も日本の渤海認識を外交文書から読み解こうと試みた。そして、日本の史料には、渤海国書が「啓」と表現される時期と「表」とされる時期があり、啓(752<天平勝宝4)年まで)→表(779<宝亀10)年まで)→啓(795<延暦14)年以降)と推移し、「表」の時期の渤海国書の内容は、いずれも史料に残されていないことを指摘した^②。

表から啓に戻る時期の796(延暦15)年の桓武天皇の国書には、「勝宝以前数度の啓、頗る体制を存し、詞義は観るべし(天平勝宝年間以前の啓は非常に形式にかなっており、表現も内容も評価すべきである)」と記されているから(『類聚国史』巻193)、過去に渤海国書が「啓」であったのは天平勝宝年間以前であると桓武天皇が証言しているのだ。

「表」は、唐や日本では皇帝(天皇)に対して用いる書式である。渤海国書が「表」であったならば、渤海は日本に朝貢していたことになるが、史料に本文が残されていないのだから、本当に「表」だったのかは疑わしい。問題はなぜこの時期に渤海国書を「表」と記したかである。

「表」の時期は、藤原仲麻呂政権の天平宝字年間から光仁天皇の宝亀年間までである。私は唐の外交儀礼の「賓礼」に、外国使節からの表を受け取る儀式があり、仲麻呂政権が賓礼を整備するため、渤海国書を(実際はそうでなくても)「表」と表現したと考えた。私の研究では、啓→表→啓という現象を指摘できたが、変化の意義を十分に考察できたわけではない。そこでつぎに、藤原仲麻呂の渤海外交に注目した。

藤原仲麻呂の渤海外交:私の研究(その2)

藤原仲麻呂の研究は政治史的な論調が多く、外交政策といえば新羅征討計画であり、渤海は新羅征討の同盟国と扱われる程度だった。しかし、新羅征討が実行された形跡はなく、日本と渤海との同盟を示す史料の根拠もない。そこで、新羅征討を軸とする仲麻呂政権の外交政策を、渤海を軸に考え直したのが私の研究である。

仲麻呂政権の渤海外交の特徴として、①渤海への専使の派遣、②渤海国書を「表」と表現、③渤海を「高麗」と表現、という3点をあげたい。②は前述したので、①と③について述べる。

①について、日本から渤海への遣使13回のうち、ほとんどが渤海使を送る「送使」である。渤海使の来日を待たずに派遣される「専使」は、758(天平宝字2)年、761(天平宝字5)年、798(延暦17)年の3例に過ぎず、うち2例が仲麻呂政権期である④。

専使の初例の小野田守は、758(天平宝字2)年に渤海に派遣され、同年のうちに渤海使楊承慶をともない帰国し、唐でおきた安史の乱について伝えた。仲麻呂は安祿山の侵攻を恐れ、大宰府に厳重な警戒を命じ、翌年からは新羅征討のために行軍式(防衛計画)を準備し、船500隻もつくらせる。新羅の後ろ盾である唐の混乱を知り、新羅征討が計画されたと考えられている。

翌759(天平宝字3)年に渤海使楊承慶が帰国する際には、在唐の遣唐大使藤原清河を迎える「迎入唐大使使」高元度らが同行し、渤海経由で入唐した。高元度は761(天平宝字5)年に帰国するが、清河の帰国には皇帝の許可が下りなかった。その年のうちに二度目の専使として高麗大山が任命される。二度の専使は新羅征討をめぐる渤海との同盟の強化とみられているが、藤原清河の帰国を模索する役割も無視できない④。

③については、『続日本紀』に758(天平宝字2)年から宝亀年間にかけて、渤海使を「高麗使」、渤海国を「高麗国」と称する記事が散見される。

759(天平宝字3)年に淳仁天皇が渤海王に宛てた国書は、「天皇敬んで高麗国王に問う」で始まり、渤海王を「高麗国王」と表現している。

渤海は大国高句麗の後継を自認しているため、高麗国号の使用は、渤海の意向だとみる説もあるが、中国・朝鮮史料に渤海を高麗国と表現する例は見当たらず、私は仲麻呂が渤海との関係を強化するために戦略的に用いたものと考ええる。

仲麻呂が、高麗大山や高麗広山という高麗氏を遣渤海使や送唐使という外交の場に登用したことも③の戦略に含まれよう。

高麗大山、広山、福信らは、もとは肖奈公氏で、747(天平19)年6月に肖奈王を賜姓され、750(天平勝宝2)年正月に高麗朝臣を賜った。

肖奈は、かつて「背奈」と記す写本から「背奈公」「背奈王」と読まれてきたが、現在では「肖奈」が正しく、『後漢書』巻85・高句麗伝にある高句麗五族のうちの「消奴部」に由来すると考えられている⑤。福信の祖父福徳は、高句麗滅亡後に日本に帰化し、武蔵国に居住したが、高句麗の消奴部出身であったのだろう。

肖奈王という王姓の下賜は、百濟滅亡により来日した百濟王族に百濟王氏が賜られたのと同様に、滅亡した高句麗王権を日本に取り込む意図があったと考えられるが、福信らは高句麗王族の出身ではない。前述の『後漢書』高句麗伝には、高句麗五族について、「本は消奴部が王為るも、稍微弱にして、後に桂婁部がこれに代わる(もとは消奴部が高句麗王を出していたが、次第に弱体化して、後に桂婁部に代わった)」とある。王族ではない消奴部出身の福信らを「高麗王」と呼ぶのは、ほかの部族出身者には不満もあるだろうから、高句麗王を輩出していた消奴部の王を表す「肖奈王」としたのではないだろうか⑥。

また、このような王姓賜与は、官人ではなく「蕃客」(客分)の待遇だとされる⑦。すると、750(天平勝宝2)年に肖奈王が高麗朝臣に改姓され、扱いが蕃客から臣下に変化したことにな

る。この年7月には孝謙天皇が即位し、藤原仲麻呂は大納言や紫微令(紫微中台の長官)になり政治の主導的地位に就く。9月には遣唐使が任命されるが、改姓したばかりの高麗大山が遣唐判官に選ばれた。これらから、高麗朝臣への改姓にも、渤海との外交を強化したい仲麻呂の意向があり、臣下の仲麻呂が客分の王族を差配するのは難しいため、肖奈王氏を高麗朝臣としたのではないか。

以上、仲麻呂の渤海外交からは、安史の乱という動乱期を迎えた国際社会に積極的に関わろうとする視野が広く、かつ野心的な政治家としての姿勢が読み取れる。一方で、仲麻呂外交からは文化的側面はみえにくい。仲麻呂政権期の仏教文物の受容や国境をこえた人的交流などが今後の課題となる。

おわりに:文化受容への展望

六国史以外の史料に眼を転じれば、異なる交流の側面がみえてくる。近年は日本古代の文化変容について関心をもっている。

発端は、日本に戒律を伝えた鑑真に先駆けて、736(天平8)年来日した唐僧道璿を、最澄につながる禪の系譜に組み込んだ『内証仏法相承血脈譜』(最澄撰)の検討であった①。禪の系譜で最澄の師となる行表が作成した道璿の中国での系譜に、最澄がインドにつながる系譜を加えてみずからの法脈としたという成立過程を導き、天台宗開祖となった最澄のもとに、それ以前の仏教文化が収斂させていく一端を明らかにした。

また、道璿とともに来日したインド僧菩提僊那が、行基と和歌を詠み交わした説話の成立を検討し、9世紀後半から10世紀にかけての日本の文化形成に、密教・和歌・渤海との漢詩文交流の記憶が影響していると考察した②。

近年、「国風文化」をめぐる議論が盛んで、日本古代史・中世史、日本文学、日本美術史など多方面で唐滅亡前後の日本の文化受容が議論されているが、上記の研究から密教の受容が古代

日本の文化変容の画期であると考え。今後は、渤海との関係や外交儀礼・外交制度を広く文化受容の側面から検討していきたい。

- ① 石井正敏『日本渤海関係史の研究』(吉川弘文館、2001年)第2部第2章。
- ② 浜田久美子『日本古代の外交儀礼と渤海』(同成社、2011年)第1章第2節。
- ③ 石井正敏前掲注①著書では、739(天平11)年の遣渤海使大伴犬養も専使に含むが、私見では犬養を送使とみなす。また、河内春人「古代国際交通における送使」(鈴木靖民・荒井秀規編『古代東アジアの道路と交通』勉誠出版、2011年)が指摘するように、呼称のうえで遣渤海使と送渤海使とのあいだに明確な区別があったわけではないだろう。
- ④ 浜田久美子『日本古代の外交と礼制』(吉川弘文館、2022年)第4部第1章。
- ⑤ 佐伯有清「肖奈氏の氏称とその一族」(『新撰姓氏録の研究拾遺篇』吉川弘文館、2001年)。
- ⑥ 浜田久美子前掲注④著書、第4部第2章。
- ⑦ 田中史生『日本古代国家の民族支配と渡来人』(校倉書房、1997年)第1編第1章。
- ⑧ 浜田久美子『「内証仏法相承血脈譜」達磨大師血脈譜の成立過程』(『大東史学』3、2021年)。
- ⑨ 浜田久美子「行基と菩提僊那の和歌贈答——「国風文化」の形成過程」(『史観』185、2021年)。
(はまだ・くみこ/大東文化大学文学部教授)

研究分野の入門書

鈴木靖民監修、高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』(八木書店、2021年)